技術・家庭科研究委員会

1　研究テーマ

一人一人が自ら拓く技術・家庭科の学習

「製作・活用・管理を通して、よりよい衣生活の自立を目指す学習」

2　研究内容（研究課題）

〈公開研究授業〉

- 期　日　　平成20年10月24日（金）
- 学校名　　須坂市立相森中学校
- 題材名　　「いつまでも大切に使いたい、ワーキングウェア」
- 学　年　　2年4組
- 授業者　　森山　仁美　教諭

昨年度までの研究で、「衣生活の自立」における指導の現状の洗い出しを行ってきた。そこで衣服への興味・関心は高く、自分らしさを衣服で表現したり、製作したりしたいと願っているが、衣服の手入れ等の管理については積極的に実践できずにいる生徒たちであることが分かった。またこれまでの指導の見返しから、製作を中心に据え授業を行ってきた結果「作ることで精一杯」「思うようにできなかったから使わない」姿を生み出していたことは否めず、製作するだけでなく、活用する中で出てくる問題を自分たちの力で解決していけるような題材展開が必要であると考えた。つまり、自分が作ったワーキングウェアを自分で着用し、そこで気づいたことをもとに、手入れや補修をしていくという学習、すなわち『「作って終わる。」』から『「作って始まる。活動して始まる。」』授業への転換を行い題材展開の中心を据え直した。そして「衣服を適切に活用し管理する力（自ら拓く力）」の具現に向け本研究を推進した。

3　研究の成果

(1)　指導の実際

ア　実際の生活とかかわれる魅力的な題材の設定

題材の選定では、まず生徒が使いたくなるような作品製作であることが大切であり、さらに裁縫経験の少ない生徒でも既習事項を生かしながら短時間製作が可能であることやそれぞれの個性、創意工夫などを生かしながら行える題材としてワーキングウェアに決め出した。そして見本品から様々なデザインやアレンジ方法を紹介することで、子どもたちの製作意欲を高めていった。また完成後はワーキングウェアの着用を位置づけ、家庭科学習だけでなく他教科やホームワークの位置づけることで、学校生活だけでなく、家庭生活にも結びつけることができた。

イ　一人一人が体験し、考え、実践することで、課題解決力を育てる学習

製作場面では、型紙づくりを兼ねながら使用する布地やカラーテープと同じサイズの紙やリボンを使っての試作を行ったり、練習布を利用したりすることで、どのように構成し縫っていけばよいか試行錯誤することで課題追究させ、見通しを持った製作が行うことができた。

また、製作したワーキングウェアを実際に使ってみる中で気づいたこと（丈夫さ・使いやすさなど）や着用後に出てきた問題点（汚れ、しわ、ほころびなど）を考えさせることで、必要感をもちながら衣服の手入れ・補修について調べ、実践し、自

らの課題を解決していこうとする学習を仕組むことができた。そして手入れや補修等の場面では、問題点や疑問点を調べたり、試し布等で実験実習したりできる場を確保し、体験をとおしてより明確な課題を持てるようした。A生は洗剤の量と汚れの落ち具合に着目して実験実習を行うことで、一定量を超えて使用しても汚れの落ち具合は変わらないとことを体験的に理解するとともに環境汚染への意識につながっていた。

ウ　学び合いの場の設定と学びのよさを実感する振り返りの時間の確保

まず座席の工夫があげられ、これは友と積極的に情報交換が行えるよう製作場面ではデザイン別に、手入れ補修場面では問題点別にした。実験実習においても、個々から出てきた問題点を友と協力しながら追究して深めていけるよう、グループ活動を位置づけることで、能率よく進めるだけでなく、結果をまとめる時にはグループ内で意見交換しながら要点的にまとめることができた。

また発表場面を意図的に設定することで、自分の追究結果を友に伝えるだけでなく、友の気づきの良さにも触れ、手入れ・補修方法の情報を、共有化していけるようにした。そして、学習の終末では発表後に「振り返りの時間」を設け、学習カードへの記入を行うことで、様々な情報を自分の課題と照らし合わせながら次時の見通しを持たせた。B生はほころびが気になり実験実習をした。そしてアイロンや洗濯の実験実習結果を聞いたことで「私の布は帆布。帆布とツイルのちがいに注意して手入れしたい。気になるところはほころびとしわだから、アイロンは高温スチーム。洗濯では色うつりするから、色の違うものとは洗わないようにしたい」と振り返っていた。これはよりよい手入れ・補修方法に気づき見通しをもつことができたことが伺える。この「振り返りの時間の確保」により、自分やグループで追究したことが、友の学びに役立つことができたことを知ることにより満足感を感じ、学び合いの良さを実感することができると考えた。

⑵　この事例から明らかになったこと

- 製作場面では実物作品などを数多く用意し、試作や試し布を使って追究させたり、手入れ補修場面では、衣服点検から問題点をみつけ、試し布等で実験実習したりできる場面を仕組むことで、教師主導型の授業から生徒が自ら課題追究を深めながら進める学習にできた。
- ワーキングウェアを通し、製作・活用・管理という衣生活の一連の流れを学ぶことで、日常着を含む「よりよい衣生活」につながった。
- 学び合いの場の設定としてグループ追究したことはもちろん、発表場面を設けたことで自分では気づかなかった視点や方法について全体の場で知り、学びを共有化することができた。また「振り返りの時間の確保」により、次時の見通しを持ち、知識・技能の活用へつながっていた。
- 学校生活・家庭生活で大いに活用できる題材だからこそ、またキット題材ではなくオリジナル性の高い題材だからこそ、生徒は作る喜びや楽しさを感じ製作学習を進め、愛着を持った作品となった。そのことがさらに、活用（着用）・管理への意欲につながっていた。

4　来年度への課題

- 様々な学習場面において、友との学び合いの良さや振り返りの時間の確保による追究の深まりを感じさせる題材選定・学習展開を考えていく。また、個々の学びの良さや可能性を実感できる場面を工夫する。
- 新学習指導要領の移行と完全実施を踏まえながら、題材開発を進める。また本研究の成果はもちろん、県の研究（全国中学校技術・家庭科研究大会）の成果を踏まえながら研究を進める。
- 家庭科分野では、小中高の関連を踏まえた系統的な指導について明確にしていく。